

食堂の入り口からいつもの窓際を覗き込む	た。	それによつて思考の巡りはさらに速度を上げ	高速で巡る思考からなんとか返答を選択し、	ちよつと。」	「えっ！？あつ、いえ、わたしは音楽系は	しながら食堂へと足を運んでいた。	った誘いを受け、色々と気まずい未来を想像	食べませんか？」とこちらも予想も出来な	様！あの・・・その、いつ、一緒に朝ご飯を	だが今朝部屋を訪ねて来た雫に「ばつ、番才	も会うことを控えようと部屋に籠っていた。	られてから三日。その間番才は女将と名取に	利他のためにできることはない突き付け	番才は箸で摘まんでいた沢庵を落とした。	思いもよらぬ人物からの唐突なその質問に、	る？」	「あのさ・・・あんたって、曲作れたりす			不思議な償い
---------------------	----	----------------------	----------------------	--------	---------------------	------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	---------------------	----------------------	-----	---------------------	--	--	--------

す	「	転	も	求	だ	返	何		頭	事	献	ま	よ	い	う	て	は	若	と
け	お	に	何	し	さ	し	度		を	に	立	ま	う	、	に	き	よ	干	、
ど	っ	“	か	た	い	背	か		下	触	を	番	。と	名	こ	た	の	の	そ
。あ	、	恥	を	が	！	を	頷		げ	れ	選	才	。と	取	ち	。急	後	こ	こ
の、	お	ず	含	、	」	向	き		な	て	び	は	。と	は	ら	い	ろ	こ	こ
え	お	か	ん	視	と	け	な		が	こ	、	あ	。と	を	を	で	め	こ	こ
っ	、	し	で	界	そ	た	ら		ら	な	先	ま	。と	声	見	そ	た	こ	こ
と	音	さ	い	の	の	。あ	そ		席	い	ほ	ま	。と	を	て	ち	と	こ	こ
・	楽	”	る	中	背	！ち	れ		に	て	ど	あ	。と	か	い	ら	共	こ	こ
・	は	が	笑	に	中	よ	だ		着	い	の	減	。と	け	た	に	に	安	こ
き	そ	追	み	入	に	つ	け		い	た	笑	っ	。と	で	。と	目	堵	こ	こ
く	の	加	に	っ	と	と	言		い	。	み	て	。と	「	を	を	し	こ	こ
、	・	さ	気	て	り	待	う		。		を	い	。と	お	け	向	て	こ	こ
そ	で	れ	づ	い	あ	っ	と				み	な	。と	は	け	け	い	こ	こ
う	き	る	き	る	え	と	利				せ	か	。と	お	ら	同	る	こ	こ
！	な	。と	、	名	ず	待	他				た	あ	。と	は	じ	じ	と	こ	こ
き	い		思	取	考	っ	は				が	ま	。と	よ	よ	よ	こ	こ	こ
っ	で		考	の	の	て	踵				が	ま	。と	よ	よ	よ	こ	こ	こ
			回	ま	要	く	を				が	ま	。と	よ	よ	よ	こ	こ	こ

を	と	一	分	る	そ	よ		し	か	な	取		足	利		「	「	い	伸	聴
抱	わ	体	で	が	う	よ		た	か	の	の		で	他		・	・	る	ば	く
え	か	?	も	、	言	。		か	と	か	方		食	の		・	・	し	した	こ
る	ら	い	な	一	わ	ま		か	と	と	へ		堂	の		・	・	た	た	と
番	な	や	け	体	れ	あ		と	表	と	顔		を	横		・	・	手	は	は
才	い	そ	れ	何	ば	っ		と	情	訴	を		出	に		・	・	の	は	は
に	こ	も	ば	が	名	た		と	で	え	向		て	そ		・	・	先	は	は
、	と	そ	名	あ	取	ん		と	訴	た	け		い	う		・	・	に	は	は
「	だ	も	さん	っ	さ	じ		と	え	。	、		っ	告		・	・	二	は	は
と	ら	誰	達	た	ん	ゃ		と	た	「	今			げ		・	・	本	は	は
り	け	か	で	ら	じ	な		と	じ	良	の			ると		・	・	の	は	は
あ	だ	が	も	こ	ゃ	い		と	ゃ	か	一			、		・	・	箸	が	は
え	っ	関	ない	う	な	か		と	な	っ	連			そ		・	・	が	綺	は
ず	た	わ	と	な	る	い		と	い	た	の			の		・	・	綺	麗	は
一	。混	った	なる	のか	か	と		と	か	じ	事			ま		・	・	に	収	は
歩	乱	の	のか	か	。	。		と	し	ゃ	は			ま		・	・	収	ま	は
前	す	か	。	。	。	。		と	ま	な	は			っ		・	・	ま	っ	は
進	る	?	。	。	。	。		と	ま	は	な			っ		・	・	っ	て	は
で	頭	)	。	。	。	。		と	ま	は	な			っ		・	・	っ	て	は
き			。	。	。	。		と	ま	は	な			っ		・	・	っ	て	は

たんだ。理由はともかく次に何をするかを考  
えてみたら？」と名取が言う。番才は一度深  
呼吸をしてから名取に向かって頷き自分の席  
を見た。ふと視界に入った雫が妙に落ち着き  
微笑んでいたことが気になつたが、番才は頭  
を切り替え残つた朝食を胃にかつ込んだ。  
「ほうなるほど音楽をか。あんた何かした  
のかい？」  
カウンター越しの女将は、いつもそうなのだ  
が今日はやけに楽しそうに見える。  
「いえ本当に何も。強いて言えば自分の無力  
さに拗ねていたくらいで。」  
部屋に戻りなと言われたあの時の自分の態度  
を思い返し自嘲した。  
「けど、利他さんの中で何かがあつたみたい  
で！理由を考えるのはやめますが、何かわた  
しにできることはないかと！」  
カウンターに拳をつき知恵を貸して欲しいと  
女将に懇願する。



た	て	「	「	「	と		の	う	女	「	く	だ	し	「	女	答	た	出
し	く	ひ	な	そ	番		番	だ	將	そ	れ	方	、	そ	將	え	て	て
に	れ	っ	ん	う	才		才	よ	は	う	た	が	重	う	の	る	く	く
頼	だ	ひ	だ	ん	が		の	。ど	少	か	ら	い	たい	す	言	代	る	前
んだ	な	っ	の	ん	女		死	うす	し	わ	話	じ	荷	。同	葉	わり	に	に
のが	ん	ひ	が	て	將		角	る？	わ	ざ	で	や	物	じ	に	に	。	。
間	て	っ	間	そ	の		へ	“	と	と	あ	な	だ	は	番	に		
違	ん	ひ	違	ん	目		と	利	ら	ら	り	い	と	さ	才			
い	な	っ	い	な	線		声	他	し	し	ま	で	し	せ	は			
だ	に	っ	だ	に	の		を	”	く	く	す	す	た	た	力			
っ	人	っ	だ	人	先		投	カ	何	何	か	か	ら	く	無			
た	生	っ	っ	生	を		げ	ウ	度	度	か	。ま	あ	あ	く			
ね	甘	っ	た	甘	見		た	ン	か	か	。ま	あ	、	あ	額			
え	か	っ	ね	か	ると			タ	。ま	。ま	あ	、	担	。額				
」	ない	っ	え	ない	と			ー	。ま	。ま	あ	、	が	く				
	よ	っ		よ	、				。ま	。ま	あ	、	せ	。く				
	。	っ		。	カ				。ま	。ま	あ	、	て	。				
	わ	っ		わ	ウ				。ま	。ま	あ	、	い	。				
		っ			ン				。ま	。ま	あ	、	担	。				
		っ			タ				。ま	。ま	あ	、	い	。				

き	「	つ	自	曲	そ	で	声	「	た	が	顔	う	い	省	今	「	心	音	利
っ	あ	て	分	作	れ	も	に	さ	両	合	を	鍵	は	と	二	ま	の	を	他
と	ん	い	の	り	な	お	反	あ	者	っ	上	に	ず	相	人	あ	準	出	は
良	た	た	夢	に	り	れ	応	あ	の	て	げ	な	さ	手	が	備	し	頭	は
い	に	の	の	に	に	は	し	、	瞳	し	女	。大	。そ	に	が	間	て	を	は
曲	そ	か	た	楽	器	歌	て	利	の	ま	将	切	れ	合	に	呼	搔	は	
が	の	を	め	も	詞	詞	目	他	奥	っ	の	に	こ	わ	吸	き	な	は	
で	た	改	に	弾	は	は	を	よ	に	た	顔	の	の	ず	を	な	が	は	
き	そ	め	ど	け	書	書	逸	。曲	、	た	を	先	先	、	。思	ら	ら	は	
る	の	を	れ	し	け	け	ら	。曲	一	利	を	き	。自	。感	。思	。悪	。思	は	
だ	た	改	だ	し	ど	ど	した	は	筋	他	を	つ	情	。自	。思	。思	。思	は	
ろ	か	め	け	楽	曲	曲	た	、	の	は	と	と	は	。自	。思	。思	。思	は	
う	を	て	恵	譜	は	は	利	筋	光	、	嫌	自	。自	。自	。思	。思	。思	は	
さ	あ	し	太	も	作	、	他	の	が	。嫌	も	分	。自	。自	。思	。思	。思	は	
。』	ん	知	に	読	れ	あ	は	。嫌	灯	。嫌	お	自	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	た	る	お	め	な	あ	、	。嫌	つ	。嫌	互	分	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	か	。』	世	る	い	あ	、	。嫌	た	。嫌	い	自	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	ら	。』	話	け	ん	あ	、	。嫌	っ	。嫌	に	分	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	だ	。』	に	ど	だ	あ	、	。嫌	た	。嫌	目	自	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	ね	。』	な	ど	い	あ	、	。嫌	っ	。嫌	を	分	。自	。自	。思	。思	。思	は	
	。	。』	な	ど	ん	あ	、	。嫌	た	。嫌	を	分	。自	。自	。思	。思	。思	は	

内側の光が逆光になり扉の奥にいた大きな	いていった。	気配を感じ、それと同時にゆっくりと横に開	で再び扉を眺める。すると扉の内側に何かの	化はなく、番才と利他は揃って女将を見た後	のが聞こえた。それから数十秒は特に何も変	すると扉の奥で微かに「リリン」と鈴が鳴る	けられている縄のように太く白い紐を引く。	「さあここだ。」と女将はその扉の横に取り付	人は、木でできた重厚な扉の前で足を止めた	女将に連れられ一階の奥へとやって来た二	浮かべた。	こくそうし』と呼ばれる者がいる。」と笑みを	で制した女将は、「ここには『符刻操師（ふ	「だからおれは・・」と言いかけた利他を目	自身が作ることになる。」	「別にわたしが作るわけじゃない。曲は利他	いかにもな女将の言葉に番才が尋ねる。	「女将さんがお作りになるのですか？」
---------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	-------	-----------------------	----------------------	----------------------	--------------	----------------------	--------------------	--------------------



追	光	外	に	の	し	よ	つ	た	づ	よ	へ	ず		頭	落	「	将	な	何
っ	に	を	向	か	て	う	た	だ	き	う	視	っ		の	ち	や	の	そ	か
た	気	覆	け	、	歩	な	野	だ	は	に	線	し		中	着	あ	言	の	を
。	づ	う	る	異	を	印	犬	け	じ	背	を	り		か	き	。	動	巨	を
	い	髪	。	形	進	象	を	の	め	を	送	と		ら	払	紡	を	軀	を
	た	の	獣	の	め	を	無	よ	て	向	と	、		逃	っ	木	待	な	を
	二	毛	の	巨	る	理	理	う	い	け	、	響		げ	た	(	っ	影	。
	人	の	に	軀	女	二	二	な	く	奥	く	返		る	女	つ	。	に	。
	は	よ	に	の	将	足	足	角	と	へ	つ	答		と	将	む		利	。
	、	う	突	案	を	で	で	ば	歩	と	く	に		い	の	ぎ	他	と	。
	そ	な	き	内	見	歩	歩	っ	い	し	り	慌		る	の	)	と	番	
	そ	体	出	人	送	く	く	た	い	た	と	て		か	の	は	才	は	
	く	毛	た	は	二	よ	人	歪	。	動	し	影		い	佇	後	は	後	
	さ	の	口	顔	人	。	型	な	徐	作	た	の		？	ま	ず	さ	ず	
	と	間	元	だ	に	と	に	も	々	で	動	方		」	い	さ	り	、	
	女	か	と	け	気	先	皮	の	。	誘	作				る	い	。	女	
	将	ら	女	を	づ	行	が	。	。	う					。				
	の	眼	以	こ	い	た	張	。	。										
	後	を	。	ち	た	。	ら	。	。										
	を			ら	。		れ												

た	か	視	し		線	じ	そ	を	て	利		図	部	的	へ	い	井	く	
こ	か	界	く	本	を	よ	の	指	い	他	「	を	屋	に	わ	た	は	、	二
の	か	に	立	棚	忙	う	こ	し	た	の	お	描	全	こ	た	は	、	人	
な	ら	入	て	の	し	な	の	て	巨	指	い	き	体	の	し	、	、	が	
い	聞	る	掛	よ	な	く	広	い	大	差	、	直	を	部	が	、	、	恐	
鳴	こ	見	け	う	な	走	大	た	な	す	あ	す	見	屋	の	、	、	る	
き	え	た	ら	こ	背	ら	な	、	水	先	れ	。	回	だ	一	、	、	入	
声	て	こ	れ	の	の	せ	室	、	槽	に	は	。	し	と	部	、	、	っ	
は	く	と	た	な	高	る	内	な	が	入	入	な	な	思	だ	、	、	た	
、	「	の	梯	い	い	。	の	ん	が	室	ら	が	っ	っ	と	、	、	部	
と	ま	な	子	生	棚	。	壁	だ	あ	し	ら	ら	自	た	っ	、	、	屋	
う	あ	い	。	物	と	。	に	？	れ	瞬	番	分	分	空	。	、	、	は	
の	く	な	そ	た	そ	。	埋	。	、	間	才	ほ	間	間	。	、	、	想	
昔	お	い	こ	ち	こ	。	め	。	。	に	は	ど	は	は	。	、	、	像	
に	ー	い	。	や	に	。	込	。	。	目	自	貫	、	位	、	、	以		
麻	い	ど	。	。	危	。	ま	。	。	に	分	。	置	。	、	、	上		
痺	聞	こ	。	な	な	。	れ	。	。	入	。	。	。	。	、	、	に		
し	い	こ	。	っ	。	。	た	。	。	っ	。	。	。	。	、	、	広		
て	い	こ	。	か	。	。	同	。	。	。	。	。	。	。	、	、	。		

いる脳に驚きを与えなかった。

「ツムギ・ヤクモ、キタ。」

ずしっとした慣れない声に二人は一気に現実へ戻され、入室と同時にかけられていた好奇心という魔法は解けた。

「おや。珍しいですね。いらっしやい。」

巨軀の案内人の先にいた白衣の人物がそれに反応する。

「さて、どちらですか？」

紡木のお手本のような笑顔に、番才は対照的な顔で会釈を返した。

↳  
続  
く  
↳